

僕って何

三田誠広

河土雪庵新社



僕って何

三田誠広

河出書房新社



僕って何

昭和五十二年七月二十九日 初版発行
昭和五十二年八月十二日 三版発行

著 者 三田誠広

装幀者 山藤章二

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

振替口座(東京)〇一〇八〇二

印刷 暁印刷

製本 大口製本

©1977 MASAHIRO MITA

定価はカバー・帯に表示しております

三田誠広(みたまさひろ)

昭和二十三年大阪市生まれ、早稲田大学文学部卒。作品には「Mの世界」(文藝四十一年九月)昭和四十一年度学生小説コンクール佳作)、「体操教師」(文藝四十七年五月)がある。

僕
っ
て
何

びっしりと蔦が絡みついた図書館の壁に沿って、一日じゅう陽のあたらない湿っぽい日かげの帯が続いている。そのひんやりとした陰の中に僕は包まれている。かすかに苔のおいするじめじめとした空気の澱みの中で、僕は身体を図書館の壁にもたせかけ、息をひそめるようにしてたたずんでいる。まわりの空気は、蔦や、煉瓦の隙間の黒い土くれや、古びた壁全体がかもしれないすじわじわとおおいかぶさるような陰気さにとけあっている。その重く、わだかまったような空気の中に僕がいる。僕はここにいます——。

ここにいます僕とは何だろう——。日ざしをうけて白く光っているキャンパスの地面の上を、急ぎ足に通りすぎていくおびただしい数の学生たちの流れを眺めながら、僕は自分自身に咬いてみる。昨日も一昨日も、僕は誰とも口をきかなかった。この半月、ひとと会話らしい会話を交したことがない。ひとり暮らしのアパート、慣れない東京での生活、大学

にも知り合いはいない。どこにいても、僕はいわば行きずりの人間だ。誰も僕のことを知らない。僕に注意を向けようとしめない。誰からもかえりみられず、何ものとも関係をもたず、地の底で息づくちっぽけな虫のように、僕は自分自身を生きながらえさせている。

僕は故郷のF町にいる母親のことを思う。半月前に駅のプラットホームで母親と別れたのが、僕を僕と認めてくれる人間と接した最後だった。喧嘩別れに近いあとあじのわるい別れだった。母親も僕も、すねたように一言も口をきかなかった。もともと僕は母親が東京までついてくることを快く思っていなかった。入学式を見たいという母親の発想自体が気に入らなかったし、子供の頃からべったりつきつきりだった母親から離れて、やっとひとりだちできると思っていた矢先だったので、ことあるごとに別れ別れに暮らすことを悲しんでみせようとする母親の存在がうるさくて仕方がなかった。

母親は下宿捜しのために先に立って周旋屋を回ったり、いやがる僕を無理につれだしてデパートじゅうを歩きまわり、身のまわりのものを買って整えてくれた。郷里では何もかも母親まかせにしていたので、自分で買ったことなど一度もない衣類や台所用品を品定めしてくれるのはありがたかったが、不必要と思われるものまでどんどん買いこむ母親のやり方は不快だった。ことに値の張るものはこちらの借りがふえるようではなかった。母親が

財布を開けるたびに僕というものが母親や故郷の家や一刻も早く逃れだしたい僕の過去の暮らしに縛りつけられていくような気がした。

たまたま母親が電気釜を買おうとした時に、おさえていた苛ら立ちの堰が切れた。食事はすべて外食ですませるか、せいぜいインスタントラーメン用の鍋があれば充分と考えていた。値段も高く場所ふさぎにもなる電気釜を買おうと頑強に言い張る母親の気が知れなかった。デパートの雑踏の中をひきまわされたあとで疲れてもいた。それに下宿を決める時、母親が勝手に周旋屋と話をつけて学生の身分には不釣合な夫婦でも住めそうな台所つきのアパートを借りてしまったことに対する不満もあった。わけもなく母親の思いどおりの生活をおしつけられるようでやりきれなかった。そうした気持ちのわだかまりが一気に噴きだして、周囲の店員や客たちが振り返るほどの声高ないさかいになってしまった。

言葉のはずみで、今すぐ田舎へ帰ってしまえ、と僕は怒鳴っていた。母親の表情がこわばった。なかば後悔しながら、それでもひっこみがつかなくなって、よし、今から切符を買いにいこう、と母親を駅へひっぱっていった。F町方面への特急は本数が少ないので、たぶん切符がないだろうとあてにする気持ちがあった。だが思いがけず翌朝の指定席券がとれてしまった。入学式は二日後だった。その儀式が母親にとって彼女の人生の一つの区

切りの意味をもっていることを僕は知っていた。知ってはいてもいままさかどうかがあるだろう。僕はものも言わず切符を母親の手の中に押しこんだ。

翌朝、駅まで母親を送っていった。母親は意地をはったふうに口をきこうとしなかった。僕も強いて言葉をかけなかった。指定席券の番号を確かめて荷物を網棚に乗せ終わった時、ちょうど発車のベルが鳴りだした。あわてて僕はホームへとびだした。扉の外へ出てしまつてから、母親に別れの言葉も告げなかったことに気づいた。車内にひきかえす時間のゆとりはなかった。ホームの縁に沿つて母親の座席の方に走つていった。窓ごしに僕を捜し求めている母親の姿がすぐ目に入った。ついさっきまでの頑なさが嘘のようないかにも心ぼそげな顔つきだった。

列車が黒い一本の線になつて林立したビルディングのあいまに消えてしまうと、僕はただひとりホームにとり残されていた。その日から半月たつ。その間、僕はアパートと大学の間を往復することで時間をつぶしながら、ひっそりとした貝のような生活を送ってきた。僕には知り合いといえる人間がひとりもない。中学や高校なら自分の教室というものがあるから隣の席の生徒とは自然に顔なじみになる。ところが大学には決まった教室も席もない。数百人収容できるマンモス教室での一般教養課目の講義はもとより、週に何時間か

あるクラス単位の語学の授業に出ても、誰かに声をかけるきっかけがつかめない。授業が終わればすぐにバラバラになって別の教室へ散ってしまう。大学案内のパンフレットに書いてあった楽しそうなクラブのある学生会館へ足を向けたこともあるが、廊下から部屋の中をのぞいてみただけでどうにも中に入る気になれなかった。何かしらはなやいだうきうきした空気が部屋の奥から押し寄せてきて、それだけで身がすくむ思いだった。クラブの部屋だけではない。教室やキャンパスや大学周辺の商店街のいたるところにみなぎっている、やりきれないほど眩しい透きとおった明るさの中に、自分をとけこませることができない。

試験を受ける前に願書の提出と試験場の下見を兼ねて大学の中を歩いてみたことがあった。その時、校舎の間の通路や中庭で、バドミントンの羽根を打ち合ったり、ギターに合わせてフォークソングを歌ったりしている学生たちの姿を眺めながら、自分の気持ちが急速に、自分でも訝しいほどに沈みこんでいくのを感じて、ひどくうろたえたことを憶えている。その時は、自分がこの大学の学生でもないのにキャンパスを歩きまわっているというひけめがあった。試験に受かれば堂々とここを歩けるのだ、と自分を慰めることができた。けれども実際にこうして毎日大学に通うようになってみても、いまだによその大学に

こっそり入りこんできたような奇妙な気おくれがつきまといて、まわりの雰囲気になじむことができない。

いまでも、こうして僕は人目につかない図書館のかげから、真夏のような日ざしに照らされたキャンパスを眺めている。昼休みのあとの授業の開始時間が迫っていて、色とりどりのファッションに身をかためた学生たちが、ラッシュ時の駅のホームのようにひしめきながら急ぎ足にキャンパスの奥へ向かっている。僕自身、授業に出なければならぬので、これからあの人の流れの中にまぎれこみ、文学部の校舎へ向かうはずだ。だが、F町の洋服屋で母親に見立ててもらった身に合わないブレザーコートを着た自分の姿は、透明な流れに投げこまれたひとつの異物のようになって、いつまでも無恰好にうきあがりつづけていることだろう。

どこかそれほど遠くないところからけたたましいマイクの声が聞こえてくる。たぶんいつものように文学部校舎の中庭でB派の連中が集会をやっているのだろう。文学部自治会はB派の拠点になっていて、タオルで覆面をし、時には角材や鉄パイプを手にした学生たちが、常時、中庭のあたりをうろついている。一般の新入生の中にも、ものめずらしさも手伝って中庭の集会に参加している者がいるようだが、僕には関係のないことだ。べつに

学生運動について深く考えたことがあるわけではないが、あの何かに憑かれたような顔つき
の学生たちの中に自分が入りこんでいけるとも思えない。

「——われわれはア……のオ……を……るためにイ……までエ……としてエ……的な
……をオ……しイまさに……的な……をオ……的に……ってきたア！」

演説の内容はいっこうに聞きとれない。音はうるさいほど響きわたっているのだが、話
し手がマイクに口を近づけすぎているせいか、それともスピーカーの調子がよくないのか、
声全体が金属的な軋みになってしまっている。それにセクトの連中はやたらと難解な用語
を使うので、スピーカーの調子がよくても演説者の言っていることを理解することはでき
ないだろう。一度B派が中庭で配っていたピラを教室まで持っていったってじっくり読んでみ
たことがあるが、書いてあることの半分も読みとれなかった。

校舎の一階の心理学教室のわきをぬけ、うす暗い通路から庭に出ると、日ざしをうけた
白いヘルメットの輝きが目にとびこんできた。中庭といっても草や木が生えているわけでは
なく、ロの字型になった校舎のまんなかに、アスファルトでおおわれたわずかな空地が
あるだけだ。その空地の中央に教室から持ちだした長椅子が並べてあり、B派の学生たち
が集会を開いている。大きな立て看板を背にリンゴ箱の演壇の上に立った演説者の姿も見

える。毎日見慣れた光景なので興味もわいてこない。そのまま通り過ぎようとして演壇の後方の通路に向かって歩いていけると、不意に人を呼び止める声が聞こえた。まさか自分のことではないだろうと思いつながら反射的に声のした方向に振り返った。すると、どことなく見覚えのある顔がこちらに向かって笑いかけている。

「よう、これからフランス語の授業に行くんだらう？」

「そうだけど……」

「そんなものよしちまってさア、この集会に参加しようじゃないか」

「——うん」

話しているうちに語学の教室で見たことのある同じクラスの男だと思いあつた。相手は白いヘルメットをかぶっている。

「ほォら、ここへ来て坐れよォ」

B派に対する身構えた気持ちもあるが、自分を見知っていてくれた人間がいたという嬉しきで、いますぐこの男と別れてしまう気になれない。今日はゲバ棒を持った学生はいないようだし、集会に出たくらいでいきなり危い目に遭うこともないだろうと、おそろるおそろる長椅子の方に進み出る。

「俺は山田っていうんだ。山田なんてくだらない名前だろう。はははっ——」

笑いながら男が顔を近づけてくると汗の臭いが鼻をついた。とっさにはわからなかったが、こうして近くからつくづく眺めると、いかにも暴力をふるいそうな恐ろしげな顔つきの男だ。ヒゲの先がぶつぶつと青黒くふきだした顎。静脈が太くうきだしたこめかみ。時として焦点が定まらなくなる三白眼の目。こういう人間はカッとするのを何をするかわからない。

山田と名のつた男はこちらににじりより、肩を組まんばかりの体勢になって話しかける。いきなりB派の理論をまくしたてられるのかと警戒していたが、そうでもなく、今のところは世間話ふうに、ベトナム戦争のことや「アンボ」のことを話しているだけだ。でもどうせ僕を呼んだのは僕を「オルグ」するためなのだろう——と思う。こいつの目的は一人でもB派の同盟員をふやすことだ。だからとくにこの僕というものに関心があったのではなく、員数を揃えるためなら誰でもよかったのだ。

そう考えるとここへ坐ったことが悔まれてくるが、でもこんなことがきっかけで、この山田という男と人間的な心の触れあい芽ばえるのではないか、いや、こんな男とつきあうくらいなら、ひとりきりでいた方がましだ——そんなことをせわしく頭の中で思いめぐ

らしている。

山田はだんだん早口になってきた。僕はB派の理論については何も知らないし、山田が話すことがだんだん一般論を離れてB派の理論に近づいてきているのかどうかもわからない。田舎の高校で受験勉強ばかりしていたので、社会や、政治や、学生運動に関する知識が自分でも情けないと思うほど欠如している。「英文解釈例題集」と「オリジナル数学問題集」の話しかないクラスメート、わざとらしく父親のしているテレビの音量をしぼったり、頃合いを見はからって夜食を運んできたりして、無言で受験勉強を強要する母親。これが僕の知っている世界のすべてだ。いったい今までの自分は、何のために、何を求めて生きてきたのだろう——。そんな思ひさえ心の中をかすめて、ひどく沈鬱な気分になりきっていると、だしぬけに、突拍子もない声が耳もとからとびこんできた。

「やまだくゥーン——」

どこか遠くへ呼びかけるような大声なのに、声の主は僕の目の前に立っている。長い髪を前に垂らしているのほとんど顔が見えないが、首すじのあたりの色の白さが際立っている、いくらか痩せ気味の女子学生だ。山田もびっくりしたふうに顔をあげたが、単に驚いただけにしては奇妙なほどどぎまぎして、身をすくめるような恰好になっている。黒い

スラックスに黒いセーターといった黒ずくめのスタイルのその女子学生は、長椅子に坐っている山田を上から威圧するように見おろしている。山田はそのいかつい顔つきには似合わないおどおどした小さな声で、「あ、戸川さん」と呟いた。その「戸川さん」が、あたりをはばからない甲高い声で怒鳴りはじめた。

「あんた、どころろついていたのよ。印刷屋へマस्पリのレジメとりにいくはずだったんでしょ。早くもってこないと予定が全部狂っちゃうんだからア。だいたい執行部室に情宜部員がひとりもないってのはどォゆうこと。あれじゃあぜエんぜん連絡がとれないじゃない。ちよつとオ、何とか言いなさいよオ」

ついさっきまで僕を圧倒する勢いで喋りまくっていた山田を最初から完全に圧倒しきっているこの女子学生に、僕は気圧され、うちのめされてしまった。自分はこの女とまともに言葉を交すこともできないだろう。女にさえ太刀打ちできない自分がつくづく惨めで、この場から逃げだしたい気もするが、同時に心の奥底の薄暗い部分で、踏みつけにされることをこころ待ちにするような気持ちで頭をもたげていた。この女に逆らって、いま山田がされているように頭ごなしにやりこめられたら、さぞこちよいだろうという気がした。こうした想像は僕を戦慄させた。僕は身動きできなくなっていた。手を伸ばせば届きそう

なすぐそばにいたる女の薄いセーターを着た腰のあたりが、長椅子に坐った僕の目の高さにある。その女らしさのとばし棒のような胴体や、ほとんど起伏が認められない胸が自然と目にとびこむ。怒鳴りながら息を吸うごとにバネ仕掛けのようにふくらんだりつぼんだりする胸。まるで心臓の鼓動が聞こえるようなまぢかで見つめるそのなまましい動きが、何かめずらしい生き物の息づきを見るように僕の思いを惹きつける。僕はぼおとした気持ちでいっしんに見つめつづける。これほどまでにひとつのものに思いが惹きつけられた覚えがない。

「あの……、レジメは取りに行かなくていいと委員長が言ったんです。あがりが遅れるんで印刷屋が届けるってことで……」

「なんだ、じゃあそれを先に言いなさいよ。それにしてもあたしに何の連絡もないなんておかしいわ」

「すみません。……ところで、こいつはオレと同じクラスの奴で、今日初めて集会に参加したんですが——」

「ごまかすんじゃないの。組織の中に身を置く以上、命令系統というものを遵守してほしいわ。あんたの上司は誰なの。たとえば北川クンの命令でも、情宣部に関することは私を捜